中国語と日本語の受動文の構造について
― 語彙的受動文と統語的受動文 ―

沈　力

目次

０.はじめに
　0-1.中国語と日本語の受動文の構成
　0-2.問題と提案
１.動詞と前置詞
　1-1.定義
　1-2.前置詞説とその問題点
　1-3.「被」の動詞性
２.動詞と一般の派生接辞
　2-1.分離説とその問題点
　2-2.動詞の「られ」と派生接辞の「られ」
３.一語説の問題と解決法
　3-1.一語説の問題点
　3-2.受動文のレベル区分仮説
４.複合動詞の名詞化
　4-1.複合動詞と動詞句の違い
　4-2.「被-V」複合動詞
５.関係節の「の格」化
　5-1.１項動詞とそうでない動詞
　5-2.「V-られ」複合動詞
６.結論と展望

0．はじめに

受動文に関しては、従来、英語の構造についての伝統的な見方に従って、(1)のような観察がなされている(cf. Keenan 1985、Crystal 1985、安井 1971 etc.)。

(1)a.能動文の目的語が対応する受動文の主語になる。
　b.能動文の主語は対応する受動文で表現されないこともある。
　c.能動形は動詞の原形であるが、受動形は非原形である。

これに対し、中国語の受動文と日本語の受動文は、どちらも(1)の定義に全く合致するわけではない。まず、(1a)に関しては、両言語の能動文の目的語は、受動文の主語となる場合とならない場合がある。又、(1b)に関しては、両言語の能動文の主語は、対応する受動文において、表現されてもされなくてもよい場合と表現されなければならない場合、そして表現されてはならない場合がある。さらに、(1c)に関しては、中国語の受動文は動詞の原形によって作られている。

中国語と日本語の受動文が伝統的な受動文の定義と食い違うという点を説明するには、２つの立場が考えられる。１つは、中国語と日本語には、もともと(1)の定義に合う受動文と合わない受動文という２タイプの受動文があるとする立場である。中国語では、この立場をとる研究はないが、日本語では、井上(1976)、柴谷(1978)、Kuroda(1979)などがこの立場をとっている。もう１つは、中国語と日本語の受動文がもともと(1)の定義に合わないとする立場である。中国語に関しては、従来の伝統文法(cf. Chao 1968、朱 1982など)から生成文法(cf. Hashimoto 1971、汤1977など)まで、すべてこの立場をとっており、日本語では、Howard and Niyekawa-Howard (1976)、久野(1983)などがこの立場をとっている。本論文では、後者の立場をとる。

0-1.中国語と日本語の受動文の構成

中国語と日本語の受動文の構成には共通点と相違点がある。まず、(2)と(3)を見てみよう。

(2)a.张三　被　狗　咬了　腿。
　b.張三は犬に　足を　かまれた。
(3)a.中国語：NP1 被　NP2　V　NP3
　b.日本語：NP1が NP2に NP3を V-られ

(2a)(2b)は、それぞれ(3a)(3b)のような構成になっている。両言語の共通点は、どちらも受動文に３つのNPが関わりうることである。相違点は、語順が異なることで

ある。中国語のVはNP3に先行するが、日本語のVはNP3に後続する。又、中国語の受動マーカー「被」は[NP2 V NP3]に先行するが、日本語の受動マーカー「られ」は[NP2 NP3 V]に後続する。

0-2.問題と提案

中国語と日本語の受動文には(4)のような現象が見られる。

(4)両言語の受動文には、NP2が現れなければならないものと、NP2が現れてはならないものと、NP2が現れても現れなくてもよいものがある。

	NP1		NP2		
(5)a.	张三	被	李四	一哭，不知怎么办好。	／張三が李四に泣かれて、困った。
b.*	张三	被	φ	一哭，不知怎么办好。	／張三が泣かれて、困った。
(6)a.*	张三	被	警察	捕了。	／張三が警察官に逮捕された。
b.	张三	被	φ	捕了。	／張三が逮捕された。
(7)a.	张三	被	警察	打了。	／張三が警察官に殴られた。
b.	张三	被	φ	打了。	／張三が殴られた。

(8)a. 太郎が　雨に　降られた。

b.*太郎が　φ　降られた。

(9)a.*この建物が日本人に建てられた[1]。

b. この建物がφ　建てられた。

(10)a.この建物が竜巻に　吹き飛ばされた。

b.この建物がφ　吹き飛ばされた。

(4)の特徴について、中国語でも日本語でも２つの説明が可能である。(11)(12)で示されているように、１つは分離説、もう１つは一語説である。

(11)分離説

a.中国語には２つの「被」がある。(5)(7)の「被」は前置詞であり、(6)の「被」は動詞でVと複合する。

b.日本語にも２つの「られ」がある。(8)の「られ」は動詞であり、(9)(10)の「られ」は一般の派生接辞である。あるいは(8)(9)の「られ」は動詞であり、(10)の「られ」は一般の派生接辞である。

(12)一語説

a.中国語には１つの「被」しかない。(5)～(7)の「被」は全部動詞である。「被」は(5)(7a)では動詞句を形成し、(6)(7b)では複合動詞を形成する。

b.日本語にも１つの「られ」しかない。(8)～(10)の「られ」は全部動詞である。「られ」は(8)(10a)では動詞句を形成し、(9)(10b)では複合動詞を形成する。

本論文では(12)の一語説をとり、(13)にまとめて提案する。

(13)中国語と日本語には２種類の受動文がある。１つは「被／られ」が主要動詞となる受動文、もう１つは「被-V／V-られ」が主要動詞となる受動文である。

(13)の提案を語形成の観点から捉え直すと、「被／られ」は、統語レベルで動詞句を形成することができ、一方、語彙レベルで「被-V／V-られ」複合動詞を形成することができる。ただし、「られ」は「被」と違って拘束形態なので、統語レベルでさらに隣接のVと複合しなければならない。

以下、第１章では、中国語の受動マーカー「被」は前置詞でなく動詞であることを論じる。もしこの論が成立すれば、(11a)の分離説が自然に否定される。第２章では、日本語の受動マーカー「られ」は一般の派生接辞と違って動詞であることを論じる。もしこの論が成立すれば、(11b)の分離説も自然に否定される。第３章では、一語説にも問題点があることを示し、この問題点を説明するには、文法レベルを区分するようなレベル区分仮説を提案する。第４章では、レベル区分仮説が中国語に証明されうることを示す。第５章では、レベル区分仮説が日本語にも証明されうることを示す。第６章では、(13)の提案が成立し、中国語と日本語の受動文は語順の差を除けば、同じ構造であることを結論づける。

１.動詞と前置詞

「被」のステイタスに関する従来の研究の中には前置詞説と動詞説との間の論争がある。この章では、「被」が前置詞ではなく動詞であることを明らかにしたい。

1-1.定義

中国語の前置詞は目的語名詞句をとり、かつ、歴史的には動詞から来ているので、動詞との区別は非常に困難である。先行研究においては、動詞と前置詞は次のように区別されている。

(14)先行研究のまとめ(cf.Chao1968、丁編1979、朱1982):

a.前置詞の目的語は省略できないが、動詞の目的語は省略できる。

b.一般に動詞には形態変化があるが、前置詞には形態変化がない。

c.動詞は述語のヘッドになるが、前置詞は述語のヘッドにならない。

しかし、(14a)の観察には問題がある。というのは、前置詞と言われているものの中には目的語が省略できるものもあるからである。

(15)a.张三　给我／φ　唱了　一支歌。／張三が(私に)歌を歌ってくれた。

b.张三淘气，我　把他／φ　打了。／張三がいたずらをしたので殴ってやった。

また、(14b)の観察にも問題がある。というのは、動詞にも形態変化がないものもあるからである。

(16)a.　张三　叫李四　去北京。　　／張三が李四を北京に行かせる。

a'.*张三　叫了李四　去北京。　　／張三が李四を北京に行かせた。

a".*张三　叫叫李四　去北京。　　／張三が李四を北京に行かせてみる。

b.　张三　认为　李四　不去北京。　／張三は李四が北京に行かないと思う。

b'.*张三　认为了　李四　不去北京。／張三は李四が北京に行かないと思った。

b".*张三　认为认为　李四　不去北京。

／張三は李四が北京に行かないと思ってみる。

一方、(14c)の観察はまだ信頼できると思われる。というのは、中国語の動詞と前置詞の違いはそれが統語上担う成分が異なるからである。(17)の「从」は前置詞にしかならないが、(18)の「朝」は前置詞でもあるし、動詞でもある。

(17)a. 张三　从北京　来了。／張三は北京から来た。

b.*张三　从北京。　　／張三は北京から。

(18)a. 这个大门　朝南　开。／この大門は南に向かって開いている。

b. 这个大门　朝南。　　／この大門は南に向かっている。

従って、本論文では、(14c)の観察を取り入れて動詞と前置詞を次のように区別する。

(19)動詞は完全な項構造を持ち、文の述語のヘッドになるが、前置詞は不完全な項

構造を持ち、文の述語のヘッドにはならない。

以下、(19)の定義で「被」が動詞なのかそれとも前置詞なのかを見てみよう。

1-2. 前置詞説とその問題点

中国語の受動文の研究では、「被」が動詞ではなく前置詞であるという見方が伝統的である(cf. Chao 1968、汤 1977、呂編 1980、朱 1982、Li and Thompson 1989、Li, Y.-H. 1990)。この見方によると、「被」構文は(20)の構造を持つ。

(20)NP [$_{PP}$被 NP] V NP

この説では、受動文の主要動詞は「被」ではなくVである。この説を支持する根拠として３つの現象があげられている。第１に、動詞は試行を表すような反復形を作ることができるが、「被」はそれができない。

(21)a. 你 打打 张三。 ／あなたは張三を殴ってみなさい。
b.*你 被被 张三 打。／あなたは張三に殴られてみなさい。

しかし、動詞には反復形が作れないものもあるので、反復形が動詞であるかどうかの基準にはならない。

(22)a. 你 会 中文。 ／あなたは中国語ができる。
b.*你 会会 中文。／あなたは中国語ができてみなさい。

第２に、普通、動詞は「一語文」を作ることができるが、「被」はそれができない。

(23)a. 看。／見てごらん。
b.*被。／こうむってごらん。

しかし、中国語には「一語文」が作れない動詞もあるので、一語文も動詞であるかどうかの基準にはならない。

(24)a. 房子 塌了。／家が崩れる。
b.*塌。 ／崩れよ。

第３に、動詞にはアスペクトマーカーが後続しうるが、「被」にはアスペクトマーカーが後続しない。

(25)a. 张三　被李四　骂-了。　／張三は李四に罵られた。
　b.*张三　被-了　李四　骂。

しかし、動詞にもアスペクトマーカーが後続しないものがあるので、アスペクトマーカーの後続も動詞であるかどうかの基準にはならない。

(26)a. 张三　嫌／*嫌-了　李四　没钱。
　　／張三は李四が貧乏であるところが嫌いだ。
　b. 张三　认为／*认为-了　李四　讨厌　自己[2]。
　　／張三は李四が自分を嫌っていると思っている。

結局、上の３つの現象は「被」が動詞か前置詞かを判断する根拠にはならない。その主な原因は以上の３つの現象は前置詞と動詞の(19)の定義の違いを反映していないからである。

1-3.「被」の動詞性

生成文法学者であるHashimoto(1971)は、「被」は前置詞ではなく動詞であるという提案を出している。彼女によれば、受動文の構造は(27)になる。

(27)[$_{S}$NP[$_{VP}$被　S]]

しかし、彼女は有力な根拠を提出してこなかった。(27)を支持する根拠としては、２つの現象があげられている。第１に、「被」と副詞との間の選択制限である。中国語では、副詞は基本的に、修飾すべき動詞に先行して動詞を修飾する。そして、ある種の様態副詞、例えば、「狠狠地(さんざん)」と動詞との間に前置詞句が介在してもよい。例えば、(28a)のように「把」句の介在は許される。しかし、「被」句は、(29a)に示されているように、介在することが許されない。このように「把」句と「被」句が異なる振る舞いをすることについて、Hashimoto(1971,訳pp.80-81)は、「被」が動詞であるからだと主張している。

(28)a.张三　狠狠地　把李四　打了一顿。　／張三はさんざん李四を殴った。
　b.张三　把李四　狠狠地　打了一顿。　／張三はさんざん李四を殴った。

(29)a.张三 *狠狠地　被李四　打了一顿。　／張三はさんざん李四に殴られた。
　　b.张三　被李四　狠狠地　打了一顿。　／張三は李四にさんざん殴られた。

しかし、この現象は(27)の構造を支持するとは言えない。なぜなら、中国語の前置詞はすべてcoverb(次動詞)であるので、(30)のように、それと副詞との間に選択制限があっても不思議ではないからである。

(30)a.张三 *狠狠地　给李四　打了　王五。
　　／張三はさんざん李四の為に王五を殴った。
　　b.张三　给李四　狠狠地　打了　王五。
　　／張三は李四の為にさんざん王五を殴った。

したがって、(29)は「被」が動詞であることは支持しても、「被」を主要動詞とするHashimoto(1971)の(27)の構造を支持するとは言えない。

根拠として挙げられる第２の現象は、「被」の目的語が省略できることである。(31)に示されるように、中国語では前置詞句の目的語は省略できないが、動詞句の目的語は省略できることから、「被」が動詞であることが導かれる。

(31)a. 他　从　北京／*φ　来了。　／彼は北京から来た。
　　b. 我　被　李四／ φ　打了一顿。／私は李四に殴られた。

しかし、前置詞の中には目的語を省略できるものもある(cf.Chao1968)。前置詞の目的語が省略できないというHashimoto(1971)の観察には議論の余地があると思われる。

(32)a.他　把表　给我们／φ　修好了。
　　／彼は私たちに時計を直してくれた。
　　b.信写完，请你　把它／φ　寄了去。
　　／手紙を書き終わったら、それを送って下さい。

以上のように、Hashimoto(1971)にも有効な根拠が挙げられていないことがわかる。その最大の原因は、前置詞説と同じように、彼女の出した２つの現象は(19)の定義を反映しないからである。

従って、ここでは(19)の定義に基づいて、(27)の受動文構造を支持する２つの新しい現象を提示する。第１の現象は受動文にはVの項として考えられないNP1がある

ということである。

(33)a.日本　被美国　建立了　軍事基地。／日本がアメリカに軍事基地を作られた。
　b.张三　被李四　把儿子　打了。　／張三は李四に息子を殴られた。
(34)a.美国　建立了　軍事基地。　／アメリカが軍事基地を作った。
　b.李四　把儿子　打了。　／李四が息子を殴った。

(34)に示されているように、「建立」と「打」は２項動詞である。それらはそれぞれ「アメリカ」「軍事基地」と「李四」「儿子」を項としてとっている。しかし、(33)の受動文にはそれぞれ「日本」、「张三」という新しい項が現れている。その項がどこから来ているのか。この問題は前置詞説では説明できないが、(27)の構造では簡単に説明することができる。即ち、「日本」「张三」は「被」の項である。

(27)の構造を支持するもう１つの現象は「被」の持っている意味素性が受動文全体のアスペクチュアルな性質を決定するということである。これは「被」が受動文の述語のヘッドであることを示す。

中国語の動詞は、[+/-状態][+/-意志]という２つの意味素性によって、(35)のように、３つのタイプに分けられる[3]。

(35)

	状態	意志
活動動詞	-	+
変化動詞	-	-
状態動詞	+	-

(35)の各タイプの例を以下にあげる。

(36)a.活動動詞→打(殴る)、看(見る)、喝(飲む)、洗(洗う)、研究(研究する)
　b.変化動詞→病(病気になる)、醒(目覚める)、得(手に入る)、活(蘇る)
　c.状態動詞→累(疲れる)、懂(わかる)、怕(恐れる)、象(似る)、

この３タイプの分類に十分な根拠があることは、以下の諸現象から明らかである。

第１に、(37)で示されているように、[-状態]である活動動詞や変化動詞は、程度副詞と共起することができないが、[+状態]である状態動詞は程度副詞と共起することができる。

(37)a.*张三　肯定　很　打　李四。／張三はとても李四を殴るに違いない。

b.*张三　肯定　很　得　奖金。／張三はとてもボーナスを得るに違いない。
c. 张三　肯定　很　懂　英语。／張三はとても英語ができるに違いない。

第２に、(38)で示されているように、[+意志]である活動動詞は、動作主の態度を表す副詞「用力的」と共起することができるが、[-意志]である状態動詞や変化動詞はそれと共起できない。

(38)a. 张三　肯定　用力地　打　李四。
／張三は力を入れて李四を殴るに違いない。
b.*张三　肯定　用力地　得　奖金。
／張三は力を入れてボーナスを得るに違いない。
c.*张三　肯定　用力地　懂　英语。
／張三は力を入れて英語がわかるに違いない。

第３に、(39)(40)で示されているように、[+意志]の活動動詞は試行を表す動詞反復形や、命令を表す「一語文」にすることができるが、[-意志]の状態動詞や変化動詞はできない。

(39)a. 张三　打了打　李四。／張三はちょっと李四を殴った。
b.*张三　得了得　奖金。／張三はちょっとボーナスを得た。
c.*张三　怕了怕　李四。／張三はちょっと李四を恐れた。
(40)a. 打！　／打て！
b.*得！　／得よ！
c.*怕！　／恐れよ！

この基準をもとに「被」の性質を考えると、(41)のように言える。

(41)「被」は変化動詞と同様に[-意志][-状態]の意味素性を持つ。

というのも、副詞との共起関係や意志を表す構文の構成可能性などの面で変化動詞と同じ振る舞いをするからである。

「被」は(42a)のように、時間副詞などと共起可能であるが、(42b)のように、程度副詞と共起できない点で、[-状態]という意味素性を持っていると考えられる。

(42)a. 张三　昨天　被李四　打了一顿。／張三は昨日李四に殴られた。

b.*张三　很　被李四　打了一顿。　／張三はとても李四に殴られた。

また、「被」は(43)のように、意志を表す副詞と共起できないし、意志性が含まれている動詞反復形や「一語文」をつくることができない点で、[-意志]の意味素性を持つと考えられる。

(43)a. 张三　被李四　打了一顿。　／張三は李四に殴られた。
b.*张三　用力地　被李四　打了一顿。／張三は力を入れて李四に殴られた。
c.*张三　被被李四　打一顿。　／張三は李四に殴られてみる。
d.*被！　／-られろ。

従って、「被」の生起の条件が変化動詞と同じなので、(41)の観察が得られる。さらに、変化動詞について次のような事実が観察される。

(44)変化動詞は現在文を構成することができないが、未来文や過去文を構成することはできる[4]。

(45)現在文
a.*张三　得　奖金。　／張三はボーナスを得る。
b.*张三　不得　奖金。　／張三はボーナスを得ない。
c.*张三　得　奖金吗？(*张三得不得奖金？)／張三はボーナスを得るのか。
(46)未来文
a.张三　会得　奖金。　／張三はボーナスを得るだろう。
b.张三　不会得　奖金。　／張三はボーナスを得ないだろう。
c.张三　会得　奖金吗？(张三会不会得奖金？)
／張三はボーナスを得るだろうか。
(47)過去文
a.张三　得奖金-了。　／張三はボーナスを得た。
b.张三　没得奖金。　／張三はボーナスを得なかった。
c.张三　得奖金-了吗？(张三得没得奖金？)／張三はボーナスを得たか。

一般に、中国語の現在文は現時点の意志や状態のいずれかのみを表すが、未来文や過去文はある事態の変化をも表すことができる。これは活動動詞と状態動詞が現在文を形成することができることからもうかがえる。

(48)活動動詞の現在文

a.张三　打　李四。　／張三は李四を殴る。

b.张三　不打　李四。　／張三は李四を殴らない。

c.张三　打　李四吗？(张三打不打李四？)　／張三は李四を殴るのか。

(49)状態動詞の現在文

a.张三　怕　李四。　／張三は李四が恐い。

b.张三　不怕　李四。　／張三は李四が恐くない。

c.张三　怕　李四吗？(张三怕不怕李四？)　／張三は李四が恐いか。

さらに、次の予測が可能である。即ち、受動文のVが活動動詞「打」である場合、「被」が前置詞で「打」が主要動詞であれば、当該受動文は未来文や過去文だけではなく、現在文も文法的であるはずだが、もし「被」が主要動詞で「打」が非主要動詞であれば、当該受動文は未来文や過去文が文法的で、現在文は非文法的であるはずである。

(50)現在文

a.*张三　被李四　打。　／張三が李四に殴られる。

b.*张三　不被李四　打。　／張三が李四に殴られない。

c.*张三　被李四　打吗？(*张三被不被李四打？)　／張三が李四に殴られるか。

(51)未来文

a.张三　会被李四打。　／張三は李四に殴られるだろう。

b.张三　不会被李四打。　／張三は李四に殴られるはずはない。

c.张三　会被李四打吗？(张三会不会被李四打？)

／張三は李四に殴られるだろうか。

(52)過去文

a.张三　被李四打-了。　／張三は李四に殴られた。

b.张三　没被李四打。　／張三は李四に殴られていない。

c.张三　被李四打-了吗？(张三被没被李四打？)／張三は李四に殴られた。

実際は(50)の非文法性と(51)(52)の文法性から、「被」が受動文の主要動詞であり、その意味素性は受動文全体に浸透していると結論づけることができる。この結論は(11a)の分離説が成立しないことを意味する。

２.動詞と一般の派生接辞

日本語はhead-finalの句構造を持つと言われているので、Vに後続する「られ」

がVより主要な要素であることは議論の余地がない。問題は、日本語の派生接辞には動詞の性質を持つものがあるということである(cf.長谷川 1990)。動詞の性質というのは(19)で定義したが、「られ」もその１例である。「られ」は拘束形態であるが、項構造を持つことから、それが動詞なのか派生接辞なのかが決められにくい。本論文は、(19)の動詞の定義に基づいて動詞を一般の派生接辞から(53)のように区別する。

(53)動詞と派生接辞との区別

拘束形態において、動詞は完全な項構造を持ち、文の述語のヘッドであるが、そうでないものは一般の派生接辞である。

「られ」は拘束形式でありながら、項がとれる性質を持っているので、先行研究において「られ」はいったいどんな性質を持っているのかが議論の中心である。

2-1.分離説とその問題点

先行研究には分離説がある。即ち、「られ」が２種類ある。１つは動詞としての「られ」であり、もう１つは一般の派生接辞としての「られ」である。そして、分離説にはさらにＡ、Ｂ、Ｃ３つの考え方がある。そして、従来、よく議論されている構文は(54)に示すものである。

	NP1	NP2	
(54)a.	太郎が	恩師に	死なれた。
b.	太郎が	恩師に	足を　引っ張られた。
c.	太郎が	殿下に	誉められた。
d.	お寺が		建てられた。

(54a,b)のNP1(ガ格名詞句)はV「死ぬ」「引っ張る」の項ではないので、「られ」の項であるとしか考えられない。(54c,d)のNP1はV「誉め」「建て」の項とも「られ」の項とも考えられる。

Ａ説は、(54a,b)の「られ」は動詞であるが、(54c,d)の「られ」は一般の派生接辞であるとするものである(cf.井上1976、柴谷1978、寺村1982、奥津1983 etc.)。これを支持する根拠として２つの現象が挙げられている。

１つ目は、動詞「られ」の構文は被害の意味にとれるが、派生接辞「られ」の構文は被害の意味にとれない(cf.(54))という現象である。しかし、これには(55)のような反例がある。

(55)a. 木の葉がそよ風に吹かれて、落ちてきた。　(中立)
　　b. 子供は、親に日本に残された。　　(被害)

動詞「られ」の構文(55a)は被害の意味にとれないが、派生接辞「られ」の構文(55b)は逆に被害の意味にとれる。従って、被害の意味にとれるか否かは分離説を支持する根拠にはならないと言える。

２つ目は、(56)(57)に示されているように、再帰代名詞の解釈において、動詞の「られ」構文には２通りの可能性があるが、派生接辞の「られ」構文には１通りの可能性しかないという現象である。

(56)太郎は、親に自分の部屋で死なれた。
　　「自分」の解釈:A. 太郎の部屋　B. 親の部屋
(57)太郎は、親に自分の部屋で殺された。
　　「自分」の解釈:A. 太郎の部屋　B.*親の部屋

しかし、(58)(59)の反例がある。動詞「られ」の構文(58)では、「自分」の解釈の可能性はＡだけであり、派生接辞「られ」の構文(59)では、「自分」の解釈はＡ、Ｂどちらの可能性もある(久野1983)。

(58)メリーはジョンに自分の部屋で頭を殴られた。
　　「自分」の解釈:A. メリーの部屋　B.*ジョンの部屋
(59)小沢さんは、鈴木さんに、自分の家で二時間も待たれた。
　　「自分」の解釈:A. 小沢さん　B. 鈴木さん

従って、再帰代名詞の解釈も分離説の根拠にはならない。

Ｂ説は、(54a,b,c)の「られ」が動詞で、(54d)の「られ」が派生接辞であるとするものである(cf. Kuroda 1979、益岡 1987、1991)。この提案にも根拠として２つの現象が挙げられている。

第１に、動詞「られ」の構文にはNP2(ニ格名詞句)が現れうるが、派生接辞「られ」の構文にはNP2が現れえないという点である。Kurodaは、NP2が現れうることは「られ」が補文をとることを意味し、NP2が現れえないことは「られ」が補文をとらないことを意味すると分析し、(54d)の「られ」は、英語の受け身のedと同じような役割を果たしていると主張している。

NP1　　NP2

(54')a. 太郎が　恩師に　死なれた。

b. 太郎が　恩師に　足を　引っ張られた。

c. 太郎が　殿下に　誉められた。

d.*お寺が　鑑真に　建てられた。

しかし、NP2が現れえない現象に対しては、「られ」を派生接辞とする説明以外に、もう１つの説明の可能性がある。即ち、「られ」がやはり動詞であり、語彙レベルでその補文のヘッドと複合しているとする説明である。本論文では後者の説明をとるが、その根拠は後の2-2節で詳しく論じる。しかし、ここで言えるのは、NP2が現れえないという現象だけでは「られ」が一般の派生接辞であるという主張の根拠にはならないという点である。

第２に、動詞「られ」の構文には「受影性」があるが、派生接辞「られ」の構文には「受影性」がないという観察である。「受影性」があるかどうかは「αに起こったことは……である」という文型が適用可能か否かによってわかるとされている(益岡 1987)。

(60)a.あの町は、日本軍に破壊された。

b.あの町に起こったことは、日本軍が(それを)破壊したことである。

(61)a.*あの町は、日本軍に建設された。

b.*あの町に起こったことは、日本軍が(それを)建設したことである。

しかし、(62a)に示されるように、動詞「られ」の構文にも「受影性」がないものがあるので、「受影性」がないからといって「られ」が一般の派生接辞だとは言えない。

(62)a. 遭難者の死体が、救助隊に、岩壁の下で発見された。

b.*遭難者の死体に起こったのは、救助隊が岩壁の下で発見したことである。

従って受影性の有無も分離説の根拠にはならない。

Ｃ説は、(54a,b)の「られ」が２項動詞で、(54c,d)の「られ」が１項動詞であるとするものである(cf. 長谷川1990)。この考え方を支持する根拠として２つの現象があげられている。

第１に、２項動詞「られ」の構文は被害の意味にとれるが、１項動詞「られ」の構文は被害の意味にとれない。しかし、前の(55)で示されているように、受動文が

被害の意味にとれるかどうかは受動文の構造と関係がないので、「られ」が２項動詞か１項動詞かを判断する根拠にはならない。

第２の理由は、英語や日本語には「られ」と平行的に、１項動詞でも２項動詞でもある「open/ひらく」のような動詞があるという点である。

(63)a. Jone opened the door. ／ジョンがドアをひらいた。
　　b. The door opened.　　／ドアがひらいた。

しかし、openタイプの動詞は、(63a)と(63b)を比べてみればわかるように、基本的に[+/-意志]の対立が見られるが、「られ」にはそのような意味的な対立が見られない。

以上の分析からわかるように、どの考え方をとっても分離説には積極的な根拠がない。その主な原因は、分離説論者が受動文の意味上の違いを構造上の違いの根拠とするからである。しかし、Howard and Niyekawa-Howard(1976)や久野(1983)が指摘しているように、当該受動文が被害の意味にとれるかどうかという点や、再帰代名詞の解釈が曖昧かどうかという点は受動文の全体の意味機能の問題であって、受動文が埋め込み文の構造か単文の構造か、つまり「られ」が動詞か派生接辞かの根拠にはならない。

(64)a.被害受身の意味(久野 1983:205)
　　「に」受身文深層構造の主文主語が、埋め込み文によって表される行為・心理状態に直接インヴォルブされていればいるほど、受身文は中立受身として解釈し易く、そのインヴォルブメントが少なければ少ないほど、被害受身の解釈が強くなる。
　b.受身文中の再帰代名詞(久野 1983:214)
　　「に」格受身文中の再帰代名詞は、埋め込み文の動作が、主文主語をその直接対象とする程度が弱ければ弱いほど、「に」格名詞句をその先行詞とし易くなる。

次に、一語説の根拠を考えてみよう。

2-2.動詞の「られ」と派生接辞の「られ」

一語説は、(54)のすべての「られ」をNP1と補文をとる２項動詞であるとする見方である。Howard and Niyekawa-Howard(1976)、久野(1983)はこの説を提案し、分離説の根拠を否定したが、一語説の根拠を出さなかった。

従来の研究では、(54a,b)タイプの「られ」が動詞であるということには異論がない(cf.Howard and Niyekawa-Howard 1976、井上 1976、柴谷 1978、Kuroda 1979、久野 1983、奥津 1983、益岡 1987、長谷川 1990)。問題は、(54c,d)の「られ」が(54a,b)タイプの「られ」と同じタイプかどうかである。この節では、(54c,d)の「られ」が(54a,b)の「られ」と同じ動詞であり、分離すべきではないことを示す。

日本語には確かに派生接辞の「られ」(以下「られ１」で示す)がある[5]。これは項構造を持たず、他動詞を自動詞化する機能を持つものである。受動文を形成する受動マーカーの「られ」(以下「られ２」で示す)は項構造を持っていると観察され、(19)の定義によれば、それは動詞である。

(65)「られ１」
　a.子供が生まれた。
　b.ポスターが剥がれた。
(66)「られ２」
　a.太郎が[親に死]なれた。
　b.太郎が[先生に子供を叱]られた。

「られ１」が派生接辞で、「られ２」が動詞であることの新たな根拠として次のようなテストが考えられる。つまり、「られ１」と「られ２」の後に、さらに、受身を表す「られ」の後続が許されるかどうかというテストである。

(67)a. こう次から次へと、子供に生まれ-られては、どんなに働いてもお金が足りない。
　b. こう立て続けに、ポスターに剥がれ-られては、いくら糊があっても足りない。
(68)a.*太郎が親に死なれ-られて、困っている。
　b.*太郎が先生に子供を叱られ-られて、夜眠れない。

「られ１」にはさらに受身の「られ」が後続されうるが、「られ２」には後続されえない。この現象から、「られ１」と「られ２」が異なる性質を持つことがうかがえる。

問題はむしろ、NP1がVの項とも「られ」の項とも考えられる(54c,d)の「られ」((69)に示す)が、派生接辞の「られ１」なのか、それとも、動詞の「られ２」なのかという点である。

(69)a.太郎が誉められた。
　b.お寺が建てられた。

ここで次のような予想が立てられる。即ち、もし(69)の「られ」が派生接辞であれば(cf.Kuroda1979、益岡1987)、それは「られ１」と同様に、さらに「られ」が後続されるが、動詞であれば(cf. Howard and Niyekawa-Howard 1976、久野 1983)、それは「られ２」と同様に、「られ」が後続されないということである。

(70)a.*花子が太郎に誉められ-られて、困っている。
　b.*太郎が隣にお寺に建てられ-られて、困っている。

実際、(70)で示されているように、(69)の「られ」にはさらに「られ」が後続されない。これは、(69)の「られ」が「られ２」と同じ性質を持つことを意味すると考えられる[6]。
　従って、(11b)の分離説は日本語においても成立できない。

３.一語説の問題と解決法
　以上の分析から、中国語の「被」と日本語の「られ」は受動文において主要動詞である以外、他の性質を持たないことがわかる。つまり、(11)の分離説が否定され、(12)の一語説が浮上してくる。しかし、一語説にも問題がないわけでもない。この章では、一語説の問題点を指摘し、その解決法を提案する。

3-1.一語説の問題点
　「被／られ」が受動文の主要動詞であることがわかっても、「被／られ」構文はどんな構造を持っているのかがまだわかっていない。ここではこの問題を追求せず、従来、Hashimoto(1971)、井上(1976)、Howard and Niyekawa-Howard(1976)、柴谷(1978)、Kuroda(1979)、久野(1983)などの(71)の構造を援用する。

(71)a.中国語：NP1 被 [$_S$ NP2 V NP3]
　b.日本語：NP1　[$_S$ NP2 NP3 V]-られ

もし中国語と日本語の受動文が(71)の構造とすれば、0-2節で出された(4)の現象が説明できなくなる。つまり、(71)の構造には(72)の問題がある。

(72)問題点(cf.(4))

NP2を補文の主語と仮定すると、NP2が受動文に現れてはならない場合には、主語のない補文を認めることになるが、それは妥当であろうか。

この問題は、従来の動詞説にとって非常に頭の痛い問題である。久野(1983)は(54d)のNP2がニヨッテ格でマークされうるのは、「NP2に」と「NP2によって」の差が単に話し言葉と書き言葉の差にすぎないからだと見なしてる。もし久野の見方が正しければ、NP2が受動文に現れえないという観察自体が正しいとは言えなくなる。

しかし、受動文における「NPによって」の用法には次の特徴が見られる。(54"a,b)のNP2は「によって」でマークされてはならないが、(54"d)のNP2は「によって」でマークされなければならない。そして、(54"c)のNP2は「によって」でマークされてもされなくてもよい。

	NP1	NP2	
(54")a.	太郎が	恩師に／*恩師によって	死なれた。
b.	太郎が	恩師に／*恩師によって	足を引っ張られた。
c.	太郎が	殿下に／ 殿下によって	誉められた。
d.	お寺が	*鑑真に／ 鑑真によって	建てられた。

もし、「NP2に」と「NP2によって」の違いを文体上の違いだけと見れば、次の問題が出てくる。(54"a,b)が話し言葉で表現されなければならないのに対して、(54"d)が話し言葉で表現されてはならない。そして、(54"c)が話し言葉でも書き言葉でも表現されうる。これはなぜか。この特徴は、「NP2に」と「NP2によって」の差を文体差に求める久野(1983)の見方では説明できない。

結局、久野が文体論からアプローチしても「NP2に」がなぜ受動文に現れえないのかという問題は解決されない。従って、(72)はやはり一語説にとって問題となる。

3-2.受動文のレベル区分仮説

3-1節で述べたように、(72)は一語説の大問題である。この問題を解決するには、語形成の視点から分析しなければならない。語形成の適用範囲は(73)に示す。

(73)語形成は語彙レベルに限る問題でもなければ、統語レベルに限る問題でもない。それは２つの文法レベルに関わる問題である(cf. Kageyama 1982、久野 1983、Baker 1988)。

この節では、２つの文法レベルを区別する基準を示し、そして、その基準を２つの受動文に当てはめると、ちょうど「被／られ」動詞句と「被-V/V-られ」複合動詞の違いが見られることを示す。

２つのレベルを区別する基準は(74)に示される。

(74)語彙レベルの複合動詞では、ノンヘッドの項が削除されるが、統語レベルの動詞句または複合動詞では、ノンヘッドの項が保持される[7]。

(74)の基準は次の現象から観察される。(75)と(76)の対比から「持ち上がる」「売り切れる」の複合では、ノンヘッドである「持ち-」「売り-」の項が削除されなければならないことがわかる。これは、「-あがる」「-切れる」が他の動詞と語彙レベルでしか複合できないことを示す。

(75)a.　机が持ち-上がった
　　b.　本が売り-切れた
(76)a.*[太郎が机を持ち]-上がった
　　b.*[店員が本を売り]-切れた

これに対して、(77)と(78)の対立から、「降り続ける」「降り始める」の複合ではノンヘッドである「降り-」の項が保持されなければならないことがわかる。 これは、「-続ける」「-始める」が他の動詞と統語レベルでしか複合できないことを示す。

(77)a. [雨が降り]-続ける
　　b. [雨が降り]-始めた
(78)a.*神様が雨を降り-続ける
　　b.*神様が雨を降り-始めた

さらに、(79)と(80)が共に文法的であることは、「-出す」「-かける」が他の動詞と語彙レベルでも統語レベルでも複合することができることを示す。

(79)a. 太郎が体を乗り-出した。
　　b. 太郎が梯子を壁に立て-かけた。
(80)a. [太郎がバスに乗り]-出した。
　　b. [熊本組が事務所を立て]-かけた。

前章ですでに述べたように、中国語と日本語の受動文の統語構造は(71)であることを思い出してほしい。

(71)a.中国語：NP1 被 [$_S$ NP2 V NP3]
　　b.日本語：NP1　　[$_S$ NP2 NP3 V]-られ

もし(74)の基準を両言語の受動文に適用すれば、次の分析が可能になる。「被／られ」が語彙レベルでVと複合する場合、ノンヘッドVの項であるNP2とNP3が削除されるが、「被／られ」が統語レベルで動詞句または複合語を形成したりする場合、Vの項が保たれる。結局、受動文を(81)のように２分類することができる。

(81)a.受動文１：NP2とNP3を持たない受動文
　　b.受動文２：それ以外の受動文[a)]

この２種類の受動文を具体例で示すと、次のようになる。(82a)と(82b)の文法性の対立から、NP1がVの目的語NP3と同一指示の場合、「られ」と「創立する」は語彙レベルでしか複合できない。

(82)a. 大学が創立-された。
　　b.*大学$_i$が[太郎に △$_i$ 創立]-された。

(83a)と(83b)の文法性の対立から、「られ」と「泣く」は統語レベルでしか複合できない。

(83)a.*太郎が泣-かれた。
　　b. 太郎が[次郎に泣]-かれた。

(84a)と(84b)が共に文法的であることから、「られ」と「殴る」は語彙レベルでも統語レベルでも複合することができると考えられる。

(84)a.太郎が殴-られた。
　　b.太郎が[次郎に頭を殴]-られた。

中国語の受動文にも日本語と同様に分析できる。ただし、「被」は「られ」と違

って自由形態なので、統語レベルで他の動詞と複合することはない。(85a)と(85b)の文法上の対立から、「被」と「俘」は語彙レベルで複合しなければならないことがわかる。

(85)a. 张三　被-俘了。　　／張三が捕まった。
　b.*张三$_1$ 被[他们　俘　△$_1$]了。／張三が彼らに捕まった。

(86a)と(86b)の文法性の対立から、「被」と「建立」は統語レベルで動詞句を形成しなければならないことがわかる。

(86)a.*日本　被-建立了。　　／日本は作られた。
　b. 日本　被[美国　建立了　军事基地]。
　　／日本はアメリカに軍事基地を作られた。

(87a)と(87b)が共に文法的であることは、「被」と「打」が語彙レベルで複合してもよいし、統語レベルで動詞句を形成してもよいことを示す。

(87)a. 张三　被-打了。　　／張三は殴られた。
　b. 张三　被[李四　打了　头]。／張三は李四に頭を殴られた。

さらに、(81)を次の(88)に解釈しなおすことができる。ここで(88)を受動文のレベル区分仮説と呼ぶ。

(88)受動文のレベル区分仮説
　a.受動文１は、[被-V/V-られ]複合動詞を主要動詞とする(単文)受動文である。つまり、「被／られ」は語彙レベルで他の動詞と複合しているのである。
　b.受動文２は、「被／られ」を主要動詞とする(複文)受動文である。つまり、「被／られ」は統語レベルで動詞句を形成する。拘束形態の「られ」は統語レベルでさらに複合する。

次の第４章では、(88)のレベル区分仮説が中国語で証明されうるかどうかを見てみよう。

４.複合動詞の名詞化

中国語は孤立的な言語なので、２つ以上の動詞が連続する場合、それが動詞句か

複合動詞かを区別するのは困難である。この節では、まず、複合動詞と動詞句とを区別する基準を考察する。さらに、同基準を受動文に当てはめると、受動文１の「被V」は複合動詞に、受動文２の「被V」は動詞句になることを示す。

4-1.複合動詞と動詞句の区別

中国語では、複合動詞と動詞句を弁別することはきわめて難しいことであるが、陆(1964,pp.82-93)は、副詞や形容詞として用いることのできる[V-N]は複合動詞であることを観察した。ここで陆の観察を(89)のように修正する。

(89)語のレベルでは品詞変換が起こるが、句のレベルでは品詞変換が起こらない。

中国語の複合動詞は常に複合名詞化されるという性質があるが、動詞句が名詞句に変わることはない。従って、主語と述語の間に「的」の挿入が可能か否かで、問題の述語が語か句かを判断することができる。

(90) a. 商店　关门了。　　／商店が休業した。
　　 b. 商店　关了窗户。　／商店は窓を閉めた。
(90')a. 商店的关-门　　／商店の休業
　　 b.*商店的关窗户　　／商店の窓を閉めること
(91) a. 总统　挨骂了。　　／大統領が罵られた。
　　 b. 总统　挨了国民的骂。／大統領は国民に罵られた。
(91')a. 总统的挨-骂　　／大統領の罵られること
　　 b.*总统的挨国民的骂　／大統領の国民に罵られること

(90'a)と(91'a)が文法的であることは、(90a)の「关门」と(91a)の「挨骂」では名詞への変換が起こりうることを示し、(90'b)と(91'b)が非文法的であることは、(90b)の「关窗户」と(91b)の「挨国民的骂」では名詞への変換が起こりえないことを示す。(89)の基準に基づいて考えれば、(90a)の「关门」と(91a)の「挨骂」は複合動詞であり、(90b)の「关窗户」と(91b)の「挨国民的骂」は動詞句であるということができる。

さらに、問題の述語が語か句かは、当該文が(新聞、書物などの)タイトルとして使われるかどうかによってわかる。タイトル文では動詞が動名詞述語になるが、特に変化動詞文の場合、アスペクトマーカーの有無によって、普通文とタイトル文が明確に区別される(cf.第１章)[9]。以下、タイトル文は『』で示される。

(92) a. 张三　患了病。　　／張三が病気にかかった。
　　b. 张三　患了一场病。　／張三が一回病気にかかった。
(92')a. 『张三　患病』　　／張三が病気
　　b.*『张三　患一场病』　／張三に一回病気
(93) a. 工人　得了利。　　／労働者が利益を得た。
　　b. 工人　得了不少的利　／労働者が多くの利益を得た。
(93')a. 『工人　得利』　　／労働者が受益
　　b.*『工人　得不少的利』／労働者に多くの利益

(92'a)と(93'a)が文法的であることは、(92a)(93a)の「患病」「得利」が動名詞になることが可能であることを示し、(92'b)と(93'b)が非文法的であることは、(92b)(93b)の「患一场病」「得不少的利」が動名詞になることが不可能であることを示す。(89)の基準で考えれば、(92'a)(93'a)の述語が複合名詞であることは、(92a)の「患病」と(93a)の「得利」が複合動詞であることを意味し、(92'b)(93'b)の述語が複合名詞ではないことは、(92b)の「患一场病」と(93b)の「得不少的利」は動詞句であることを意味する。

さらに、タイトル文に動名詞述語が要求されることは、「的」が挿入された場合の(94)(95)の(a)と(b)の文法性の違いと(92')(93')の(a)と(b)の文法性の違いと平行することからわかる。

(94)a. 张三的患病。　　／張三の病気にかかること
　　b.*张三的患一场病　／張三の一回病気にかかること
(95)a. 工人的得利　　／労働者の受益
　　b.*工人的得不少的利　／労働者の多くの利益を得ること

4-2. 「被-V」複合動詞

(89)の基準を受動文の述語に適用すれば、次のような予想が可能である。もし受動文１の述語が複合動詞ならば、当該述語が複合名詞に転換する可能性がある。もし受動文２の述語が動詞句ならば、当該述語が複合名詞に転換する可能性はない。まず「的」の挿入から検証してみる。

　　NP1　　NP2　　NP3
(96) a. 张三　被　砸了。　　／張三が押しつぶされた。
　　b. 张三　被石头砸了右脚。／張三が石に右足を押しつぶされた。
(96')a. 张三的　被　砸　　／張三のおしつぶれ(たこと)

b.*张三的　被石头砸　右脚　／張三の石に右足をおしつぶされたこと

(97) a. 研究室　被　　盗了。　／研究室は盗難に遭う(た)。

b. 研究室　被贼　盗了。　／研究室は泥棒に盗まれる(た)。

(97')a. 研究室的被　　盗　　／研究室の窃盗

b.*研究室的被贼　盗　　／研究室の泥棒による窃盗

(98) a. 张三　　被　　打了。　／張三が殴られた。

b. 张三　　被　　打了脑袋。／張三が頭を殴られた。

(98')a. 张三的　被　　打　　／張三の殴打

b.*张三的　被　　打　脑袋　／張三の頭を殴打

(96'a)(97'a)(98'a)に「的」が挿入できることは、受動文１の(96a)の「被砸」、(97a)の「被盗」、(98a)の「被打」が名詞への変換が可能であることを示し、(96'b)(97'b)(98'b)に「的」が挿入できないことは、受動文２の(96b)の「被石头砸右脚」、(97b)の「被贼盗」、(98b)の「被打脑袋」が名詞への変換が不可能であることを示す。受動文１と受動文２における述語の差はアスペクトマーカーが生起しないタイトル文にも見られる。

(99) a. 『张三　被　　砸』　／張三が圧死

b.*『张三　被石头砸右脚』　／張三が石に右足を押しつぶされ(ること)

(100)a. 『研究室被　　盗』　／研究室が盗難

b.*『研究室被贼　盗』　／研究室が泥棒によって盗難

(101)a. 『张三　被　　打』　／張三を殴打

b.*『张三　被　　打脑袋』　／張三が頭を殴打

(99)～(101)における(a)と(b)の文法性の違いは、(96')(97')(98')における(a)と(b)の文法性の違いと平行する。アスペクトマーカーが生起しない場合の変化動詞が複合名詞であると考えれば、この平行性から、受動文１の述語は複合名詞への転換が可能であるが、受動文２の述語は複合名詞への転換が不可能であることがわかる。従って、この節の予想が正しいことが立証される。 つまり、受動文１の述語、即ち、(96a)の「被砸」、(97a)の「被盗」、(98a)の「被打」は複合動詞であるが、受動文２の述語、即ち、(96b)の「被石头砸右脚」、(97b)の「被贼盗」、(98b)の「被打脑袋」は動詞句であると考えることができる[10]。

以上の観察から、(88)の仮説は中国語においては可能であることがうかがえる。次に、日本語において(88)の仮説が可能であるかどうかを見てみよう。

5.関係節の「の格」化

日本語の「られ」は拘束形態なので、語彙レベルでも統語レベルでもほかの動詞と複合しなければならない。問題はこの２つのレベルでの複合がどのように検証されるかということである。２つの文法レベルの複合動詞を分ける基準(74)から、つぎのような予想が得られる。語彙レベルではノンヘッドの項であるNP2とNP3が削除されるので、受動文１の「V-られ」は１項動詞であるが、統語レベルではノンヘッドの項であるNP2とNP3、またはどちらかが削除されないので、受動文２の「V-られ」は１項動詞ではないということである。この節では、この予想を検証する。

5-1.１項動詞とそうでない動詞の区別

１項動詞か否かは、当該動詞文が関係節になる場合、どの文の主語名詞句が「の格」化できるかによって判断される。

日本語の関係節は、(102)に示されているように、関係節とヘッド名詞句との統語的な関係から２つのパターンに分かれる。(102a)はヘッド名詞句が関係節の動詞の項となっているパターンであるが、(102b)はヘッド名詞句が関係節の動詞の項とならないパターンである(cf.寺村 1980)。

(102)a.サンマを焼く男
　　b.男がサンマを焼く匂い

さらに、日本語の関係節には、(103)に示されているように、主語名詞句の「が格」が「の格」化する現象が見られる。

(103)a.男が／の焼いたサンマ
　　b.サンマが／の焼けた匂い

「が格」が「の格」化する場合、様々な条件があると言われているが、ここでは、(102b)のパターンの関係節における「の格」化の条件を(104)に示す。

(104)「の格」化の条件
　(102b)のパターンの関係節において、関係節の動詞が１項動詞である場合しか「の格」化ができない。

(105) a.太郎が飲んだ。
　　b.太郎がお茶を飲んだ。

(105')a.太郎が／の飲んだ店

b.お茶を、太郎が／*の飲んだ店

(106) a.太郎が借金した。

b.太郎が花子にお金を借りた。

(106')a.太郎が／の借金した理由

b.花子にお金を、太郎が／*の借りた理由

(105a)と(106a)の１項動詞文が関係節になった場合、(105'a)と(106'a)で示されているように、「太郎が」が「の格」化できる。一方、(105b)の２項動詞文や(106b)の３項動詞文が関係節になった場合、(105'b)(106'b)で示されているように、「太郎が」が「の格」化できない。しかし、(105'b)(106'b)の「が格」名詞句が「の格」化できないのは、単に関係節に他の要素が存在しているからではないかと思われるかもしれないが、(107)に示されているように、関係節の動詞が１項動詞でさえあれば、他の要素が存在しても「が格」名詞句が「の格」化できることがわかる。

(107)a.六時まで、太郎が／の飲んだ店

b.外国で、太郎が／の借金した理由

5-2.[V-られ]複合動詞

(104)の条件を受動文に当てはめると、つぎの予想が可能になる。もし受動文１の「V-られ」が１項動詞ならば、その関係節の主語名詞句が「の格」化できる。もし受動文２の「V-られ」が１項動詞ではなければ、その関係節の主語名詞句が「の格」化できない。

(108) a.太郎が殴られた。

b.太郎が花子に殴られた。

(108')a.太郎が／の殴られた店

b.花子に、太郎が／*の殴られた店

(109) a.太郎が撫でられた。

b.太郎が花子に頭を撫でられた。

(109')a.太郎が／の撫でられた理由

b.花子に頭を、太郎が／*の撫でられた理由

(108'a)(109'a)の主語名詞句が「の格」化できることは、(108a)(109a)の「V-られ」が１項動詞であることを示し、(108'b)(109'b)の主語名詞句が「の格」化できない

ことは、(108b)(109b)の「V-られ」が１項動詞ではないことを示す。さらに、(110a)中の「によって格」名詞句を持つ受動文が関係節になる場合、(110b)で示されているように「の格」化が可能である。これは「によって格」名詞句がNP2と違って、(107)の「六時まで」「外国で」と同じように付加語であることを示す。

(110)a.『源氏物語』が紫式部によって書かれた。
　　b. 紫式部によって、『源氏物語』が／の書かれた時代

以上の観察から、(88)の仮説が日本語においても可能であることがうかがえる。

６.結論と展望

本論文では、中国語と日本語の受動文の構造について(13)を提案し、且つ可能であることを主張した。その提案は即ち、中国語にも日本語にも「被／られ」を主要動詞とする受動文と「被-V／V-られ」を主要動詞とする受動文があるということである。さらに、中国語の受動文と日本語の受動文は、語順(VとNP3の位置、受動マーカーと[NP2 V NP3]の位置)の差を除けば、構造上、全く同じであるということができることを示した。

さらに、両言語に見られる(111)の現象(=(4))を(13)の提案で次のように説明することができる。

(111)(=(4))
　　両言語の受動文には、NP2が現れなければならないものと、NP2が現れてはならないものと、NP2が現れても現れなくてもよいものがある。

　　NP1　　NP2

(112)(=(5))
　a. 张三　被　李四　　一哭，不知怎么办好。／張三が李四に泣かれて、困った。
　b.*张三　被　φ　　一哭，不知怎么办好。／張三が泣かれて、困った。

(113)(=(6))
　a.*张三　被　警察　　捕了。　　／張三が警察官に逮捕された。
　b. 张三　被　φ　　捕了。　　／張三が逮捕された。

(114)(=(7))
　a. 张三　被　警察　　打了。　　／張三が警察官に殴られた。
　b. 张三　被　φ　　打了。　　／張三が殴られた。

(115)(=(8))
　a. 太郎が　　雨に　　降られた。

b.*太郎が　　φ　　降られた。

(116)(=(9))

a.*この建物が日本人に建てられた。

b. この建物がφ　　建てられた。

(117)(=(10))

a. この建物が竜巻に　吹き飛ばされた。

b. この建物がφ　　吹き飛ばされた。

(112)～(117)の(a)では、「被／られ」が主要述語となっているが、(b)では、「被-V／V-られ」複合動詞が主要述語となっている。(112b)と(115b)が非文法的であるのは、「被」と「一哭」、「られ」と「降る」が語彙レベルで複合できないことを示し、(113a)(116a)が非文法的であるのは、「被」と「捕」、「られ」と「建てる」(「建て」の内項が「られ」の外項と同一指示の場合に限る)が語彙レベルでしか複合できないことを示す。(114)と(117)の(a)(b)が共に文法的であることは、中国語の場合、「被」と「打」が複合してもしなくてもよいことを示し、日本語の場合、「られ」と「吹き飛ばす」が統語レベルで複合しても、語彙レベルで複合してもよいことを示す。

最後に、中国語と日本語の２つの受動文の構造について触れておく。「被-V／られ-V」を主要述語とする受動文の場合、(118)に示されているように、１項動詞文の構造である。

(118)a.[$_S$NP[$_{VP}$被-V]]

b.[$_S$NP[$_{VP}$V-られ]]

しかし、「被／られ」が主要述語である受動文の場合、どういう構造になるかが問題として残されている。(119)(120)に示されているように、少なくとも、２つの可能性が考えられる(cf. Larson 1988,1990、Jackendoff 1990、Aoun and Li 1989)。

(119)a.[$_S$NP[$_{VP}$被 NP S/VP]]

b.[$_S$NP[$_{VP}$NP S/VP られ]](cf. 益岡 1991)

(120)a.[$_S$NP[$_{VP}$被 S/VP]]　　(cf. Hashimoto 1971)

b.[$_S$NP[$_{VP}$S/VP られ]]　(cf. 久野 1983 etc.)

「被／られ」は(119)のように３項動詞と見るほうがよいのか、それとも、(120)のように２項動詞と見るほうがよいのかは今後の課題としたい。

注

1: (9)では、NP2はニヨッテ格でマークされうるが、ニヨッテ格はニ格と違って、付加語である(cf. Kuroda 1979、益岡 1987、 砂川 1984、 細川 1986、金水 1991)。具体的には5-2節を参照されたい。

2: 一方、「被」と「认为」には次のような相違がある。

(i)a.张三　被　李四　骂-了。　　／張三は李四に罵られた。

b.张三　认为　他　骂-了　李四。　／張三はかれが李四を罵ったと思う。

訳から分かるように、(ia)の「骂」に後続するアスペクトマーカーは文全体のモダリティを示すが、(ib)の「骂」に後続するアスペクトマーカーは文全体のモダリティを示さない。しかし、この現象は別に前置詞説を支持するわけではない。というのは、(ia)と(ib)における「了」の解釈の差は(ii)の(a)と(b)におけるポーズの挿入の差と平行するからである。

(ii)ポーズの挿入可能性

a.*张三被＾李四骂-了。

b. 张三认为＾他骂-了李四

(ii)では「被」と「李四」の間にはポーズが入らないが、「认为」と「他」の間にポーズが入る。これは、「被」構文が兼語文であり、「认为」構文が兼語文ではないことを示す。従来、使役動詞と言われている「叫」も「被」と同じ振る舞いが見られる。

(iii)a. 张三　叫　他　骂-了　李四。　／張三は彼に李四を罵らせた。

b.*张三叫＾他骂-了李四。

この問題について詳しい論述は別稿に譲る。

3: ここの動詞分類は马(1988)によって提案されたものである。これは必ずしも十分ではない。少なくとも活動動詞の中には[+/-持続]の分類も必要なようである。ただ、「被」の性質を考察するには、马の３分類で十分であると考えられる。また、理論上、(35)のパラダイムには[+状態][+意志]という意味素性を持つ動詞が考えられるが、中国語には存在しない。

4: 現在文が無意志の変化を表すことができないという観察は主文とする場合の現在文に限る。もし、現在文が主文でなければ、変化動詞が実現可能である。

(i) 张三得奖金是好事。／張三がボーナスを得ることはよいことだ。

(ii)如果张三得奖金的话，我就找领导评理去。

／もし張三がボーナスを得るならば、上司に文句を言う。

5: 「られ」が自動詞接辞であることは村木(1991:33-47)、Jacobsen(1992:55-61)を参照されたい。次の-areは-rareの異形態と見ることができる。

(i)a.基本形　　ø　:　-are

um　→ um-u　　: um-are-ru

hag　→ hag-u　　: hag-are-ru

sog　→ sog-u　　: sog-are-ru

b.基本形　　e　:　-are

wak　→ wak-e-ru　: wak-are-ru

c.基本形　　-as　:　-are

*araw → araw-as-u : araw-are-ru

*han　→ han-as-u　: han-are-ru

*kow　→ kow-as-u　: kow-are-ru

6:　(69)の「太郎」と「お寺」は「られ」の外項であるが、「誉める」「建てる」の内項と同一指示であるので、「られ」が「誉める」「建てる」と複合する場合、同定という規則に基づいて、ノンヘッドである「誉める」「建てる」の内項を併合してしまうと説明したい。外項と内項の概念についてGrimshaw(1990)を、同定という概念についてLi.Y.-F(1990)、沈(印刷中)などを参照されたい。

7:　日本語の複合語にはある構成素が統語レベルのVP,NP,S内の一要素と複合するものがある。

(i)a.[金が欲し]-さに

b.[女性の気持ち]-泥棒

c.[結婚式が終了]-後に

Kageyama(1982)、Shibatani and Kageyama(1988)、影山・柴谷(1989)はこの場合の複合語を統語レベルの複合として扱っている。本論文では、この分析を参考にして(74)を提示した。

8:　従来の研究では、「被／られ」が補文をとるという提案であるが、筆者は補文だけではなく、VPをとることもできると考えている。例えば、

(i)a.张三　被　[$_{VP}$踩了　脚]

b.張三が　[$_{VP}$足を踏]まれる

(i)では「足を踏む」行為にagentが誰かと関係なく、「张三」がある外からの行為を被ったことを表すので、そこの「足を踏む」ことを補文とは言えない。従って、本論文では、受動文２にはNP2とNP3がどちらか現れればよいのであって、必ずしもNP2とNP3が共に現れるとは限らない。この問題に関する詳しい議論は別稿に譲る。

9:　(92'a)(93'a)のタイトル文は次の日本語と同じスタイルである。

(i)a.『核実験停止を６月まで延長』(『毎日新聞』1992年10月20日朝刊)

b.『砲撃再開で17人が死亡』　　(同上)

10:　中国語では、「被-V」複合動詞はかなり生産的である。

(i)　a.张三　被-抓了。／張三が捕まえられた。

b.张三的被-抓　　／張三の逮捕

c.张三　被-抓　　／張三を逮捕

(ii) a.财物　被-抢了。／財産が奪われた。

b.财物的被-抢　　／財産の強奪

b.财物　被-抢　　／財産を強奪

(iii)a.财物　被-偷了。／財産が盗まれた。

b.财物的被-偷　　／財産の強盗

c.财物　被-偷　　／財産を強盗

参考文献

丁树声(編). 1979　『现代汉语语法讲话』商务印书馆.

高名凯. 1986. 『汉语语法论』商务印书馆. 200-218.

陆志韦・管变初・蒋希文・任建纯・王福庭・许树智. 1964. 『汉语的构词法（修订本）』科学出版社.

吕淑湘编. 1980. 『现代汉语八百词』 商务印书馆.

马庆株. 1988. 「自主动词和非自主动词」『中国语言学报』3期. 157-180.

汤廷池. 1977. 『国语变形语法研究　第一集』台湾学生书局.

王　力. 1985. 『中国现代语法』商务印书馆.

朱德熙. 1982. 『语法讲义』 商务印书馆.

沈　力. (印刷中). 「关于汉语结果复合动词中参项结构的问题」『语文研究』山西省社会科学院語言研究所.

井上和子. 1976. 『変形文法と日本語(上、下)』大修館書店.

奥津敬一郎. 1983.「何故受身か」『国語学』132集. 65-80.

影山太郎・柴谷方良. 1989. 「モジュール文法の語形成論」久野暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版. 139-166.

久野　暲. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.

――　―. 1983. 『新日本文法研究』大修館書店.

――　―. 1986. 「受動文の意味 ― 黒田説の再批判 ― 」『日本語学』Vol.5. 明治書院. 69-76.

黒田成幸. 1985. 「受け身についての久野説を改釈する ― 1つの反批判 ― 」『日本語学』Vol.4. 明治書院. 70-87.

金水　敏. 1991.「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164集, 1-14.
柴谷方良. 1978.『日本語の分析』大修館書店.
沈　力. 1990.「中国語の結果補語を取る[V-得]文の構造」『言語学研究』第9号, 58-92.
砂川有里子. 1984.「<に受け身文>と<によって受け身文>」『日本語学』Vol.3. 明治書院. 76-87.
塚本秀樹. 1987.「日本語における複合動詞と格支配」『言語学の視界　小泉保教授還暦記念論文集』大学書林:東京. 127-144.
寺村秀夫.1980.「名詞修飾部の比較」国広哲弥編『日英語比較講座　第２巻文法』大修館書店. 221-266.
ーーーー.1982.『日本語のシンタクスと意味Ｉ』くろしお出版.
長谷川信子. 1990.「原理とパラメータのアプローチにおける受動構文」『認知科学の発展 ― 特集認知革命』Vol.2.講談社. 89-107.
細川由起子. 1986.「日本語の受身文における動作主マーカーについて」『国語学』144集. 124-113.
益岡隆志. 1987.『命題の文法 ― 日本語文法序説 ― 』くろしお出版.
ーーーー. 1991.「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版. 105-122.
松下大三郎. 1930.『改選標準日本文法』中文館書店.
村木新次郎. 1991.『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
安井　稔(編). 1971.『新言語学辞典』. 研究社.

Aoun, J and Y.-H. A. Li. 1989. "Scope and constituency," *Linguistic Inquiry* 20, 141-172.
Baker, M. C. 1988. *Incorporation--A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.
Chao, Y.-R. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.
Crystal, D. 1985. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Blackwell.
Grimshaw, J. 1990. *Argument Structure*. The MIT Press.
Hashimoto, A. 1971. *Mandarin Syntactic Structures*.（アン・Ｙ・ハシモト.『中国語の文法構造』1986.(中川正之、木村英樹訳)白帝社.）
Howard, I. and A. M. Niyekawa-Howard. 1976. "Passivization," Shibatani, M. (ed.) *Japanese Generative Grammar.(Syntax and Semantics* Vol.5) Academic Press.

Huang, C.-T. J. 1982. *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Ph.D. dissertation, MIT.

Jackendoff, R. 1990. "On Larson's treatment of the double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.

Jacobsen, W. M. 1992. *The Transitive Structure of Events in Japanese. (Studies in Japanese Linguistics* Vol.1.) Kurosio Publishers.

Kageyama, T. 1982. "Word Formation in Japanese," *Lingua* 57, 215-258.

Keenan, E. L. 1985."Passive in the world's language," Shopen, T.(ed.) *Language typology and syntactic description Vol.1, Clause structure,* 243-281. Cambridge University Press.

Kuroda, S.-Y. 1979. "On Japanese Passives," Bedell, G., Kobayashi, E. and M. Muraki(ed.) *Explorations in Linguistics--Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Kenkyusha.

Larson, R. K. 1988. "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.

－－－－－. 1990. "Double objects revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 587-632.

Li, C.N. and S.A. Thompson. 1989. *Mandarin Chinese--A functional reference grammar*. University of California Press.

Li, Y.-F. 1990. "On V-V Compounds in Chinese," *Natural Language & Linguistic Theory* 8-2, 117-207.

Li, Y.-H. A. 1990. *Order and Constituency in Mandarin Chinese. (Studies in Natural and Linguistic Theory,* vol.19.) Kluwer Academic Publishers.

Miyagawa, S. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese. (Syntax and Semantics* vol.22). Academic Press.

Shibatani, M. and T. Kageyama. 1988. "Word formation in a modular theory of grammar: postsyntactic compounds in Japanese," *Language* 64:3, 451-484.

Williams, E. 1981. "On the notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'," *Linguistic Inquiry* Vol.12, 245-274.

Яхонтов, С.Е. 1957. *Категория Глагола в Китайском Языке.* Ленинград:Издательство Ленинградского Университета.(С.Е.ヤーホントフ.『中国語動詞の研究』1987.(橋本万太郎訳)白帝社.)

（しん　りき、博士後期課程）